

〈研究ノート〉上野伊三郎と日本インターナショナル建築会

飛田 清佳

はじめに

日本インターナショナル建築会（以下、「建築会」）は、一九二七年七月二日、上野伊三郎（一八九二―一九七二）を中心に結成された。結成時の会員は上野のほか、本野精吾（一八八二―一九四四）、伊藤正文（一八九六―一九六〇）、中尾保（一八九四―一九六三）、新名種夫（一九〇二―一九五二）、石本喜久治（一八九四―一九六三）の計六名であった。後に加入した主な人物として、中西六郎（一九〇〇―一九六四）、香野雄吉（本名加納龍一、一九〇四―一九八八）が挙げられる。活動期間は約六年と短い、最大で二〇〇名弱の会員を擁し当時の日本建築界において少なからぬ知名度、影響力を持ったと考えられる。

上野伊三郎と妻リチ（一八九三―一九六七）は、上野がウィーン分離派の中心人物であるヨーゼフ・ホフマン（一八七〇―一九五六）の建築事務所に勤務していた一九二五年に結婚、翌年帰国した。夫妻に関する作品、資料は二〇〇六年、京都インターアクト美術学校から京都国立近代美術館に寄贈された。これを受け二〇〇九年に同美術館で開催された「上野伊三郎ナリコレクション展―ウィーンから京都へ、建築から工芸へ」を契機に、上野や「建

築会」の再評価が進んでいる。本稿では近年の研究成果を踏まえ、上野と「建築会」の活動を同時代の建築ジャーナリズムとの関わりから考察する。

インターナショナルとローカリティ

「建築会」は各三項目の宣言、綱領を掲げた。「日本に於ける問題の解決に基本を置いて世界各国の同志と提携して共同の目的に向かつて進む」（宣言の三）、「様式の建設には伝統的形式に依る事を排し狭義の国民性に固執せず真正なる『ローカリティ』に根拠を置く」（綱領の二）の二項が特に注目される。本野精吾は機関誌『インターナショナル建築』創刊号において、前者を「日々に各民族の間が接近しつゝある事は争ふ余地もなき事実である。世界を流れる人類の共通性は次第に濃厚の度を増して行くと思はれる事は正しいと思はれる」、後者を「偏狭なる見解を捨て、真正なる民族的地方色の上に立脚せむばならぬ」と解説した。

山野英嗣は「ローカリティ」を「氣候風土的な個性」とみなす先行研究を引用しつつ、上野伊三郎の「旧島津邸」（一九二九年竣工）【図1】を例に、⁽¹⁾

インターナショナルとローカリティの関係を説明している。⁽²⁾ 装飾を排したモダニズム建築のなかに、窓の上部と最上階に水平線を強調する突き出た庇をつけることで高温多雨という日本のローカリティを組み込んだこの作品は、上野個人のみならず「建築会」の代表作とされている。

ローカリティは、特に設計競技において主流になりつつあった帝冠様式への批判を強く含むものでもあった。「建築会」に関する先行研究では触れられることは少ないが、一九三〇年～一九三一年の東京帝室博物館（現東京国立博物館本館）コンペ【図2】の際に「建築会」が発表した不応声明はそれを顕著にあらわしている。応募規定に「日本趣味を基調とする東洋式」と明記されたため、このコンペに対しては『国際建築』など東京を拠点とする雑誌にも多く批判が寄せられた。しかし「建築会」の不応声明は、あえて関西からの発信であったこと、また反対の意思表明をしないかぎり声明に賛同するとみなすというやや強引な手法も相俟って、当時の日本建築界に強い印象を残したと考えられる。

上野伊三郎とブルーノ・タウト

「建築会」の主な活動内容は、一九二九年八月～一九三三年五月までの『インターナショナル建築』【図3】の発行に加え、数回の展覧会が記録されている。また特徴として、ヴァルター・グロピウス（一八八三～一九六九）、ペーター・ベーレンス（一八六八～一九四〇）、ブルーノ・タウト（一八八〇～一

九三八）ら最大十名の「外国会員」の存在があった。⁽³⁾

ブルーノ・タウトはドイツの表現主義建築家として知られ、「鉄のモニュメント」（ライプツィヒ国際建築博覧会、一九一三）や「グラスハウス」（ドイツ工作連盟ケルン展、一九一四）を手がけ、また一九一七年～一九二〇年にかけて次々に執筆、出版された『都市の冠』『アルプス建築』『都市の解体』『宇宙建築師』ではユートピア構想を発表した。一九二〇年代には「馬蹄形ジードルング」（一九二五～一九三〇）や「カール・レギーエンの住宅都市」（一九二八～一九三〇）をはじめとする集合住宅の設計で名声を得ている。

一九三二年～一九三三年二月のモスクワ滞在後タウトはドイツに戻るが、社会主義への接近をナチ政権に咎められることを避け出国する。その理由となったのが、日本インターナショナル建築会大会への招待状を所持していたことであつた。以降一九三六年十月までの約三年半におよぶ日本滞在期間を通じて、上野はタウトのため尽力し、またタウトの推薦で上野自身も一九三六年～一九三九年まで群馬工芸所の所長として高崎に居を移している。田中辰明は、タウトに日本を去ることを勧めたのも上野だったと指摘している。⁽⁴⁾

タウトの日本での実作は「旧日向別邸（現熱海の家）」の地下三室（一九三六年九月竣工）および「大倉邸」のインテリア（一九三六年四月完成）のわずか二作のみであるが、数多くのデッサンと執筆活動が特筆される。なかでも来日翌日の一九三三年五月四日、タウトの誕生日に上野が案内した桂離宮の印象を後日まとめたスケッチは、一九四二年にタウト全集第一巻として育生社弘道閣より出版された後、一九八一年、二〇〇四年に岩波書店から『画帖 桂離宮』として単独で刊行され、「日本美の再発見者」としてのタウトの

イメージを決定づけた。岸田日出刀が一九二九年に『過去の構成』で言及していた桂離宮再評価の動きに、タウトが加わり建築界の注目を集めたことが、先述のローカリティを含む日本のモダニズムという道筋に桂離宮を位置づける役割を果たしたと考えられる。

雑誌『デザイン』と『建築と社会』

「建築会」が設立された一九二〇年代後半は、『建築世界』（一九〇七—一九四四）、『建築と社会』（一九一七—）、『新建築』（一九二五—）、『国際建築』（一九二五—一九六七）等、建築関係雑誌の相次ぐ創刊により、建築にまつわる公の言説空間が確立した時期と一致する。関西を基盤とする雑誌としては『デザイン』（一九二七—一九三五）と『建築と社会』の二誌があげられる。

創生社発行の『デザイン』【図4】は一九二七年九月の創刊で、当初は設立まもない「建築会」の機関誌として機能した。『インターナショナル建築』刊行後は『無名』の技術者たちの主張の場を与えること⁽⁵⁾を眼目に発行が続く。

日本建築協会の機関誌である『建築と社会』には、本野精吾、中尾保ら「建築会」のメンバーも寄稿している。さらに同誌の中心人物であった武田五一は、東京帝室博物館コンペの審査員をつとめるなど建築界における影響力が強く、さらに本野とは師弟関係にあった。「建築会」の先行研究においてこのような人的ネットワークに言及するものは管見の限り未だ少なく、今後の課題といえる。

注

- (1) 奥佳弥、笠原一人『日本インターナショナル建築会』における上野伊三郎の言説について」日本建築学会学術講演梗概集、二〇〇〇年九月
- (2) 山野英嗣「上野伊三郎・リチの活動に見る『東西文化の磁場』『東西文化の磁場—日本近代の建築・デザイン・工芸における境界的作用史の研究』（国書刊行会、二〇一三年）三七—六二頁

- (3) 笠原一人「上野伊三郎の建築活動について」日本建築学会計画系論文集、六四九号、二〇一〇年三月

- (4) 田中辰明『ブルーノ・タウト—日本美を再発見した建築家』（中央公論新社、二〇一二年）、八四頁

- (5) 笠原一人「雑誌『デザイン』の概要と特徴について」日本建築学会学術講演梗概集、二〇〇四年八月

〔図版出典〕

【図1】【図3】【図4】

「上野伊三郎＋リチコレクション展—ウィーンから京都へ、建築から工芸へ」図録（京都国立近代美術館、二〇〇九年）

【図2】『建築雑誌』五四六号、一九三二年六月

（千葉大学大学院人文社会科学科博士後期課程）